

マライア・エッジワース

『倦怠』(1809) の処方箋

——専門教育と理想のパトリオット創出——

吉 野 由 利

序

アングロ・アイリッシュ系作家マライア・エッジワース (Maria Edgeworth) の小説は、しばしば「ネイションの物語」(‘national tale’⁽¹⁾) として読まれるが、同時代の「ネイション」(‘nation’) という概念をめぐる論争言説にどのようにかかわっているのだろうか。これに答えるためには、彼女の小説が理想とするパトリオティズム (‘patriotism’) に注目することが重要である⁽²⁾。ネイションの概念に関する論争は、啓蒙主義コスモポリタニズム (Enlightenment cosmopolitanism) の定義とロマン主義ナショナリズム (Romantic nationalism) の定義を二極として展開されたが、両極はそれぞれ次のような弊害に制約されている。啓蒙主義コスモポリタニズムには普遍性を追求し、個別性を軽視する傾向が、一方、ロマン主義ナショナリズムには個別性を強調するあまり、排他的な差異化を進める傾向がある。エッジワースの作品が理想とするパトリオティズムは、これらの制約を越えたネイションの定義を可能にする概念なのである。

エッジワースの主要小説は、しばしば専門教育 (‘professional education’⁽³⁾) を基軸としたパトリオット養成のテーマを展開する⁽⁴⁾。中でも、『倦怠』(Ennui, 1809) は、パトリオット養成プログラムの成功例である主人公を語り手としている稀で貴重な作品である⁽⁵⁾。本稿は、『倦怠』のテーマにおいて、いかに専門教育が主人公兼語り手の「倦怠」という「精神的な病」の治療に必須であり、また、いかにその教育の言語能力を養う効果が、彼を理想のパトリオットとして再生させるかを論じる。更に、専門教育が、女性には門戸を閉ざし、男性にも階級的な制約を適用するシステムであるがゆ

えに、『倦怠』のテーマ上展開されるパトリオティズムの理想は、文化関係に関して柔軟であるのに、ジェンダー・階級に関してはイデオロギーの限界を持つことも併せて指摘する。ひいては、テーマ分析に加え、テキストの形式的側面に注目し、語りのモードも議論の対象とする。そうして初めて、『倦怠』における理想的パトリオティズムの概念形成は、啓蒙主義コスモポリタニズムとロマン主義ナショナリズムが「女性性」に課す家父長制的制約に、テーマ次元では妥協しているかのように見えるものの、テキストの他次元ではそれほど容易に妥協していないことが明らかになるからである。このようなアプローチにより、最終的には、エッジワース批評に顕著である政治的読みへの傾倒では看過されがちな、作品の文学性を救出することを試みたい⁽⁶⁾。

I. 啓蒙主義コスモポリタニズムとロマン主義ナショナリズムのコンテクスト⁽⁷⁾

エッジワースの時代のイギリス⁽⁸⁾ 及びアイルランド⁽⁹⁾ では、政治・思想風土における主流のイデオロギーが、啓蒙主義コスモポリタニズムからロマン主義ナショナリズムへと変遷しつつあった。イギリスにおけるロマン主義ナショナリズム言説の正典とされるエドマンド・バーク (Edmund Burke) の『フランス革命に関する省察』(*Reflections on the Revolution in France and on the Proceeding in Certain Societies in London Relative to That Event in a Letter Intended to Have Been Sent to a Gentleman in Paris*, 1790⁽⁹⁾) の論敵は、仏革命政府及びその理念の原理とみなされた啓蒙思想である。また、忘れられがちであるが、『省察』の弾劾の標的がイングランド啓蒙主義者の非国教会派牧師、リチャード・プライス (Richard Price) の「われわれの郷土愛／愛国心についての説教」(‘A Discourse on the Love of Our Country’, 1789⁽¹⁰⁾) でもあることに留意すると、啓蒙主義コスモポリタニズムとロマン主義ナショナリズム間のイデオロギー的な緊張関係が一層明確になるであろう。『説教』は、自分たちの‘country’ (国家を意味するか郷土を意味するかは曖昧) を愛することは「排他的」(‘exclusive’) であるべきでなく、「世界市民」(‘citizens of the world’) としての意識と両立されるべきであると、啓蒙主義コスモポリタニズムと融合したパトリオティズムの理想を説いた (p. 181)。啓蒙主義コスモポリタニズムは、ディヴィッド・ヒューム (David Hume) のエッセー「ネイションの性格について」(‘Of National Characters’⁽¹¹⁾) に端的に表されているように、血縁や文化的ルーツの共有よりも、市民社会における共通の利益をネイション結束の拠り所として重視する⁽¹²⁾。このエッセーで、ヒュームはネイションを‘one political body’ とみなし、その求心力としてまず

‘defence, commerce, and government’ といった市民社会的共通利益を挙げる (p. 82)。⁽¹²⁾ ‘[T] he same speech or language’ もネイションの性格に関与すると述べるが、ネイションの(言語)文化の個別性を追求していく関心は示さない⁽¹³⁾。対照的に⁽¹⁴⁾、ロマン主義ナショナリズム言説は、ネイションの構成には、慣習や伝統文化を仲介とした有機的な絆が不可欠とし、「文化ナショナリズム」(‘cultural nationalism’) と称される所以ともなっている⁽¹⁵⁾。例えば、バークの『省察』は、貴族や地主階級の所領が先祖伝来の ‘custom’ や ‘tradition’ を象徴する文化遺産であるという見解から、その文化遺産を保護する世襲制土地制度こそ、ネイションの文化的な一体化を助ける装置であると強調する⁽¹⁶⁾。そして、その土地制度を転覆した仏革命政府や転覆を図るイングランドの革命共鳴者達を、伝統文化を解体する「大工」、あるいは「ユダヤ人のような」、「拜金主義者」などと呼び侮蔑する。このように、ロマン主義ナショナリズム言説によるネイションの概念形成は、しばしば「攻撃的な差異化」を伴う⁽¹⁷⁾。

Joep Leerssen によると、アイルランドにおける啓蒙主義コスモポリタニズムからロマン主義ナショナリズムへのイデオロギー転換は、1800年の「合同法」制定前にアングロ・アイリッシュ系支配層に唱えられた「パトリオティズム」から、19世紀に顕著になった「ナショナリズム」への転換と呼応する。彼は、18世紀アイルランドの「パトリオティズム」は ‘a society consisting of the pragmatic association of individuals with common interests’ を志向するのに対し、19世紀アイルランドの「ナショナリズム」は ‘a nation tied by the natural bonds of common descent and a common cultural heritage’ を志向すると論じる⁽¹⁸⁾。このようなイデオロギーの転換は、エッジワースの家族を含むアングロ・アイリッシュ系地主階級にとって危機をもたらした。彼らの主流はイングランド出身の植民者を祖先に持ち、先住アイルランド人達の多くと出自も文化的ルーツも共有しなかった。それ故アイルランドにおける彼らの土地所有と支配の正当性は、啓蒙主義コスモポリタニズムのパラダイムでは擁護され得たが、ネイションの構成に文化的な条件を偏重するロマン主義ナショナリズムのパラダイムでは大きな問題となった⁽¹⁹⁾。カトリック処罰法に庇護されたプロテスタント(多くは国教会派)の彼らは、マイノリティの特権階級であり、イギリス政府の後ろ盾を必要とした。ところが、イギリス政府はカトリック寛容路線に傾くこともあり、彼らの特権を損なう可能性を十分にもっていた。このような状況下、アングロ・アイリッシュ系エリート達がアイリッシュ・ネイションのリーダーとしての自らの権威を正当化することは急務であり、1772年制定のグラタン憲法で実現されたアイルランド議会のイギリス政府からの形式的な独立も、議会を中心として社会改革を目

指した「パトリオティズム」の唱導も⁽²⁰⁾、その流れで起こったとされる。

この文脈を重視した先行研究に Esther Wohlgemut と Cliona Ó Gallchoir の論文が挙げられる⁽²¹⁾。それぞれ、エッジワースの作品が植民地体制と共犯関係を持つかどうか、という問いに終始した評価では軽視されがちなテキストの側面を、再評価する意義を持つからだ。Wohlgemut は、エッジワースの「アイルランド物」のジャンルが、啓蒙主義コスモポリタニズムとバークの強調する土地への愛着を折衷し、‘non nationalist patriotism’あるいは‘positive comopolitanism’を提案すると明快に論じた (p. 653)。Ó Gallchoir は、W. J. Mc Cormack の提言⁽²²⁾に倣い、「イングランド物」「フランス物」などのジャンルをも対象とした一層広い視野に立ち、エッジワースの啓蒙主義コスモポリタニズム転用を論じる際、ポスト仏革命のジェンダー・階級文脈に留意する必要があると強調した。その文脈においてこそ啓蒙主義転用とイギリスの女性に望まれる「女性らしさ」間の緊張関係が明確になるという、Ó Gallchoir の論点は、ジェンダー関連にはほとんど触れない Wohlgemut の論文を補う。両論文に通底するのは、エッジワースの作品が同時代の支配的イデオロギーを単に転用するだけでなく、その限界の克服に挑戦しているという、積極評価である。本稿は、その挑戦において、作品における専門教育を重点としたパトリオティズムの概念形成が、極めて重要な役割を担うことを、『倦怠』の例を通して論じる。エッジワースの「教育」概念は、Wohlgemut が異文化を個人のナショナル・アイデンティティに後天的に吸収することを可能にすると重視したものの (p. 647)、その因果関係を裏付けないままであった。本稿は、「教育」の中でも専門教育に注目し、それが多言語能力・多文化理解を培い、文化的に柔軟な個人とネーションの関係を可能にする仕組みとして『倦怠』に描かれていることを明らかにする。

II. 「倦怠」の病の治療——専門教育とその言語学習効果——

『倦怠』は *Tales of Fashionable Life* シリーズ (1809-1812) の第一集 (1809) に収録された、エッジワースの主要「アイルランド物」第二作である。序文には、このシリーズの目的が ‘the circles of fashion’ 上を行き来する ‘the higher classes of society’ が陥りやすい過ちを描写する旨、父リチャード・ラベル・エッジワース (Richard Lovell Edgeworth) の名前で記されている (p. 159)。また、同年出版のエッジワースと父リチャードの共著『専門教育論』(*Essays on Professional Education*, 1809) に表された考えを、より「馴染みのある」形式で伝えることも意図する、と付け加えられ

ている⁽²³⁾。

『倦怠』は、主人公兼語り手のグレンソーン伯による「回顧録」の体裁をとる。アイルランド生まれの語り手は幼少期に両親を失い、莫大な遺産の相続人としてイングランドで育つ。無責任な後見人や家庭教師に甘やかされ、‘voluntary exertion’を嫌悪する生活を送るようになった結果、若くして「倦怠」の「病」に悩み、成人し遺産相続してもその症状は改善しない。自殺を試みた際、アイルランドから乳母エリナー・オドナヒューが現れ、アイルランドのグレンソーン領に戻るよう説得する。アイルランドに渡った語り手は所領管理に乗り出すが、気儘な采配で小作人に実質的な恩恵を与えるにはほど遠い。やがてエリナーは、自分が彼の実の母親(‘lawful mother’)であり、自分の息子クリスティとして通っている人物こそ本物のグレンソーン伯であると暴露する。語り手は他人の財産の‘unlawful’な所有はできないと、クリスティと身分を交換する。クリスティ・オドナヒューと改名し、特権的地位や財産を喪失した彼には、努力で経済自立を図ることが余儀ないものとなる。折りしもセシリア・ディラミアを恋するようになり、彼女との結婚を成就させる為には立身出世の必要が決定的にあるということを悟った瞬間、「倦怠」の症状から解放される。弁護士として頭角を現した語り手はセシリアとめでたく結婚。一方、本物のグレンソーン伯は、所領管理の仕方が分からず、妻の放蕩になす術もない。スコットランド啓蒙主義に影響を受けた代理人によって報告されるグレンソーン城は、‘riotous living’と‘the most wasteful vulgar extravagance’ (p. 297) の光景を呈する始末である。ついには、城が火事で全焼し、伯爵の跡継ぎジョニーが焼死することで、爵位継承直系のラインが途絶える。火事は、大金を手にして「何もすることがなく」飲酒癖に陥ったジョニーが誤って出火したものだった。つまりジョニーを悩ませた「倦怠」は、彼の自滅と城の焼失まで招いてしまったのである。絶望した伯爵は、語り手に宛てた手紙で、グレンソーン領の法的相続人はセシリアだから、その夫である語り手に所領を引き継いでほしいと懇願する。語り手はこの相続で、今度は合法的な手続きによりグレンソーン伯となり、ここに「グレンソーン伯の回顧録」という副題も正当化される。

ジョニーのような結末を迎ったかもしれない語り手の「倦怠」の治療に、医者「グランド・ツアー」を勧めるが、ツアーで経験するコスモポリタンな根無し草生活は効き目がない。次の大きな治療策としてテキストが用意するのは、「不在地主」生活の終了と、パークの賞賛する地域に根をおろした地主生活の開始である。『専門教育論』は、「紳士」(‘gentlemen’)を、従来の意味の「専門職」(法曹、聖職者、医者、軍人など努力が必要とされる実力主義の‘profession’)と同様、国家で最も重要な役割を担う

という根拠で、「専門職」のひとつとしてみなす⁽²⁴⁾。この「紳士」の再定義が示唆するのは、模範的な地主の所領管理は地域共同体の秩序のみならず国家の繁栄につながるという理解から、紳士を従来の専門職と共に、理想のパトリオティズムを実現する要員候補とみなす視座である。所領相続人の若者は、世襲特権に甘んじて無為に過ごすことなく、勤勉な専門職精神を学び、将来の地主紳士という専門職に備えること、例えば戦時中は軍隊に入り国家防衛に奉仕することが勧められている (pp. 263-64)。『倦怠』の語り手はこういった紳士に望まれる準備・教育のないまま地主業に着手し、自ら認めるようにイギリス帝国の現状や政治経済に無関心であった為、その時点では「倦怠」の病を駆逐し、有用な地主・パトリオットに生まれ変わることはない。小作人達の文化背景や必要性を理解せず、自己本位の好意を押し付ける語り手の地主業が空回りするのは、例えばエリナーに贈ったイングランド式の家が無駄となる経緯に示される⁽²⁵⁾。その一方で語り手はこの機会を通して小作人達の話すアイルランド方言に馴染み、多言語的、ゆえに多文化的な理解を培っていく。その成果は、彼がアイルランド方言の 'a justice of peace' の用法を読者に説明する際、顕著に発揮される: 'To English ears the possessive pronouns *my* and *his* may sound extraordinary, prefixed to a justice of peace; but, in many parts of Ireland, this language is perfectly correct' (強調原文のまま。p. 207)。引用部は、語り手がアイルランド方言独特の用法だけでなく、その基盤となる闘争が激しいアイルランド政治文化の特徴をも認識していることを示唆する。

「倦怠」の病から語り手を救出し、正統な地主・パトリオットとして再生させる治療には、実力主義の法曹教育・実務経験が不可欠となる。法曹教育課程における彼の努力・忍耐の結実を象徴するのは、法言語の習得であり、初めて大成功を収めた法廷の場面は、彼が「自信と流暢さをもって弁護した」('spoke with confidence and fluency' p. 305) と記録する⁽²⁶⁾。この場面は、語り手が以前領地周辺で宗教・政治的な派閥化が進む中、クリスティを反逆者と断定して襲ったプロテスタント一味の有罪を法廷で必死に訴えたものの敗訴して、地主としての権威を失墜した彼の 'first public exertion' のエピソードと、鮮やかな対照をなす。この対照が示唆するように、法言語の習得は語り手に地主・パトリオットとしての権威を確立・保守する手段を与える。また、語り手が法言語を修めた成果は、上述のアイルランド方言に馴染んだ成果のように、多文化理解と直結する。例えば、「倦怠」というテーマ概念はテキストを通じて原語表記されているが、それは 'ennui' というフランス語の概念を英語に翻訳するのは不可能であるという語り手の多文化理解に基づく: 'For this complaint there is no pre-

cise English name; but, alas! The foreign term is now naturalized in England' (p. 162). 法曹界における成功の鍵が、「法フランス語」・「法ラテン語」を含めた 'professional language' を習得することにあるのは『パトロニッジ』で明示されることから、引用部の表す『倦怠』の語り手の多文化理解も、法曹教育の多言語学習の成果として解釈できよう⁽²⁷⁾。そしてこういった多言語・文化理解は、エッジワースが理想とするパトリオットに重要な、普遍を偏重する啓蒙主義コスモポリタニズムの限界を開く境地として描かれるのである。

引用部の語り手の発言は、Debrah Cameron の定義する「言語衛生」('verbal hygiene') としても機能するように思われる⁽²⁸⁾。ネイションの言語問題に干渉することは、エッジワースの理想的なパトリオットにとって重要な任務である。「言語衛生」は標準語推進と解釈されることが多いが、ここでは Cameron の定義に従い、方言を認める立場から言語問題へ干渉することも含める。例えば、上述の 'a justice of peace' の語法説明や、『ラックレント城』、『アイルランド方言の不合理表現について』(*An Essay on Irish Bulls*, 1802) などにおけるアイルランド方言の解説は、イングランドで冷笑されがちな方言の用法を、アイルランドの人々の愚劣の証としてではなく、創意工夫ある言葉の営みとして理解すべきであると訴え、標準語一辺倒ではない「言語衛生」を実践する。その一方、エッジワースの作品は、標準語の満足な習得を欠く多言語能力を、模範的パトリオットの資質として容認しない。例えば、先住アイルランド人の登場人物達の多言語能力は、母語ゲール語に加え、英語のアイルランド方言と法律用語を操るものの、標準英語の運用が不十分であるというたった一つの特徴のため、彼らが理想のパトリオット候補として作品の中で位置づけられることはない⁽²⁹⁾。

グレンソーン領の法的相続人 ('heir at law' p. 289) がセシリアであることから、語り手の専門職上の成功が、彼女との結婚のみならず、正統な地主・パトリオットへの道を切り拓くことは意味深い。セシリアは当初彼に偏見を抱いていたが、それは彼が努力できない人物である上に文学的教養を欠く ('without any taste for literature'), と伝え聞いたからであった (p. 290)。プロット上、専門教育なくして彼が読書を広げることはなく、専門教育はその点からも彼とセシリアの結婚の障害を取り除く。語り手も、テキスト末部で自分の再生を集約する際、'a taste for literature' (p. 308) を得たことを誇る。この文学的素養は、多言語能力・多文化理解が昇華したものと解釈でき、専門教育はこの点においても、彼を理想の地主・パトリオット候補として有力にし、セシリアとの結婚とグレンソーン領の所有回復という褒美をもたら

す。

『倦怠』におけるパトリオティズムのテーマ処方は、このように専門教育によって語り手の「倦怠」の病を治療し、彼を文化的に柔軟である地主・パトリオットとして蘇生させる。それと連動し、彼のナショナル・アイデンティティもまた多文化とつながりがあるものとして表象される。彼は先住アイルランド人の血を引き、幼少は‘Irish cabin’——アングロ・アイリッシュ系地主の‘Big House’の対極にある、ケルト慣習の息づく貧しい生活空間——でエリナーに育てられ、その後ケルト封建の余韻残るグレンソーン領への回帰を通し、先住アイルランド人の風習・文化に対する理解を深める一方、自らを‘British Nobleman’で‘English ears’を持つと認識する。フランス発祥の「倦怠」の病歴から、彼のナショナル・アイデンティティにフランス文化の痕跡も否めない。イングランド的、あるいはアングロ・アイリッシュ的な専門教育は、こういった語り手のナショナル・アイデンティティに単なるひねりを加えるだけでなく、多言語・多文化理解を語り手に付与することにより、多文化を包摂する彼のアイデンティティが分裂危機に陥るのを予防する方策も授けると解釈できる。このようなグレンソーンのナショナル・アイデンティティは、彼がアイルランド及びイギリスの支配階級の一員として有望であることを示唆し、巻末に報告される彼のグレンソーン城再建開始を、理想のパトリオットとしての事始めとして解釈することを可能にする。テクストが、1795年から1805年の間のアイルランドとイングランドに設定されていることから、Marilyn Butlerが指摘するように、語り手の文化的に多様なナショナル・アイデンティティは、アイルランドとイギリスの合同を象徴していると解釈できるであろう⁽³⁰⁾。しかし、その象徴で大切なのは、Butlerの強調する複数の文化併存だけでなく、その併存に調和をもたらし得る専門教育に基づいたパトリオティズムでもあることを強調したい。

III. 『倦怠』における理想のパトリオティズムと階級・ジェンダー

このようなテーマ解釈から、作品はイギリスの将来を、世襲制土地制度に庇護された貴族・地主階級よりも、実力主義の新興専門職階級に託していると結論することもできよう。しかし、テーマ次元ですら、後者を完全に理想化しない。例えば、実力主義に共感を示すセシリアでさえ、自分の身分を落としてまで実力本位の男性を支持するという考えを持たないことを、語り手も納得する (p. 292)。彼に法曹界入りを勧めた‘Irish nobleman’のY卿が実力社会を賞賛する口調も微妙である。グラタン議会

の「パトリオット」として有名なチャールモント卿をモデルとしたとされる Y 卿は、努力して優れた能力を開花させた人物には、国家の最重要職に就く機会が開かれていると謳い、語り手を励ます (p. 293)。しかしながら、語り手がひとたび Cecilia とその家族を納得させる能力を証明すれば、後は彼らの世襲的特権に与ることができるであろうと付け加える (p. 294)。つまり、実力勝負をし続ける必要が必ずしもないことを示唆するのである。セシリアの母が、オドナヒューの姓——先住アイルランド人で「卑しい」身分の出自を示す⁽³¹⁾——に対して嫌悪を露にしても、Y 卿は異議を唱えない。まさにその姓が背負う社会的不利を乗り越えようとする語り手に、ディラミアの姓と紋章を用いることをあっさり勧めるのだ。

一度返還したグレンソーン領が語り手に巡ってくるのも、専門職上の成功で獲得した経済力による購入でなく、「合法的な」相続という形態による。生来のグレンソーン伯は、語り手に宛てた手紙で、自分が差し出す爵位・財産の相続手続きは「法」に基づいていると強調する：‘I write this to beg you, being married, of which I give you joy, to miss Delamere, that is the *hare* at law, will take possession of all immediately, for I am as good as dead, and will give no hindrance’ (強調原文のまま。p. 308)。法定「相続人」(heir) と言うべきところを「兎」(‘hare’) と綴り間違いする伯爵は、その生得権にも関わらず、模範的地主・パトリオットに必要な資質を欠くことを決定的に露呈する。ここで明らかになるのは、彼が法言語も標準英語も満足に運用できないことである。(「相続人」という法言語の用語を正確に綴れないだけでなく、「兎」という標準英語の単語も正確に綴れない。) エッジワースの世界において、基本的な法言語の習得は、所領の維持に根本的な必要条件である⁽³²⁾。また、上で触れたように標準英語の運用能力は、「言語衛生」というパトリオットの務めに必須である。グレンソーン伯の手紙における言語運用は理想のパトリオットに不相応であり、テキストは、その言語運用を「クリスティ・オドナヒュー」の署名——彼が生得の名前・爵位を捨てて、育ての名と地位を選択したことを表す——に負わせることによって収拾する。

『倦怠』の語り手は、『ラックレント城』のジェイソンのように、努力によって専門職で成功し、怠け者という先住アイルランド人表象のステレオタイプを覆す。善意と正義を尊重する語り手は⁽³³⁾、ジェイソンよりもはるかに良心的で正当なパトリオット候補として描かれるが、世襲の財産所有権の法的な相続なしに土地所有を達成することが難しい点では、ジェイソンと同様の制約に縛られている。(ジェイソンは没落したラックレント家最後の家督からラックレント城を現金によって買い取ろうとするが、

その企てが成功したかどうかは曖昧なまま『ラックレント城』は閉じる。) それゆえ、これら初期「アイルランド物」二作から浮かび上るのは、土地制度が実力社会成功者の経済力によって転覆されない世界である⁽³⁴⁾。これらの作品は、専門職に従事する登場人物の功績を称えるが、彼らを世襲制土地制度の中に安全に取り込むという限定つきである点で、伝統的な土地制度を前提とする啓蒙主義コスモポリタニズムとロマン主義ナショナリズムの階級観⁽³⁵⁾を是正していない。

このように『倦怠』の描くパトリオティズムが想定するネイションは、文化に関しては柔軟であるかもしれないが、階級に関してはそれほどではないのである。ではジェンダーの役割に関してはどうか。テキストの描く理想の男性パトリオットの役割は観察してきたが、理想の女性パトリオットはどのような役割を期待されているのだろうか。作品において最も雄弁な女性パトリオットは、ジェラルディーンであろう。オールド・イングリッシュ⁽³⁶⁾系貴族階級出身の彼女は、次の引用部やイギリスの官僚となった夫の赴任に随行しインドに発つ展開に表されるように、アイルランドとイギリスへの二重の忠誠を体现する⁽³⁷⁾重要な登場人物である。仲間の女性が服飾に夢中になっていることに軽蔑を示しながら語る彼女の台詞は、パトリオティズムの概念とジェンダーの役割の相関関係に触れる: 'We Irish might live in innocence half a century longer, if you didn't expedite the progress of profligacy' (p. 227). この発言の前提となっているのは、ネイションの運命は女性メンバーの思慮に左右されるというジェンダー観である。この観点は、女性登場人物達がネイション構成員の生活に大きな役割を果たすプロットと共鳴する。例えば、語り手が実力勝負の道に奮い立つのもセシリアに認めて貰いたいという動機が大きい。さらに、彼女が彼の努力と能力を認め、グレンソーン城相続の恩恵を彼と共有することが、彼が理想のパトリオット・地主になることの必要条件である。グレンソーンには離婚歴があり、初婚相手が彼の「倦怠」克服を助けなかったのと意味深い対照をなす。しかしながら、テキストは理想的な女性パトリオットの役割を制限する。『パトロニッジ』で財政先行きが不安になったパーシー氏が娘の将来を思いやって嘆くように、地主階級生まれの女性達には、同等の生まれの男性達に開けている専門職の機会が閉ざされ、それゆえ生まれ持った社会地位を実力で維持・上昇させる機会が閉ざされているからである。ジェラルディーンとセシリアの人物造型も、語り手を凌駕する多言語能力や階級社会における可動性を欠き、「女性らしさ」を家庭空間に限定する啓蒙主義コスモポリタニズムとロマン主義ナショナリズムに共通した家父長制的なジェンダー観⁽³⁸⁾を打破していない。

IV. 『倦怠』におけるパトリオティズムの理想とその権威づけ——語りの権威——

『倦怠』の語りのモードは、グレンソーンの「一人称」、より厳密には「個人的な声」(‘personal voice’⁽³⁹⁾)を語りの権威とする。それに匹敵する権威を付与された語りの声はない⁽⁴⁰⁾。エッジワースの作品中「個人的な声」の使用は少なく、他の初期代表作は『ラックレント城』のセイディの語りである。セイディの「個人的な声」の権威は、「編集者」なる人物の語りの権威と競合する。前者はアイルランド方言でテキスト本文を構成し、それに後者は標準英語で注釈をつけ、先住アイルランド人達の言語・風習などを学問的に解説する。このような複雑な語りの権威の構成と比べると、『倦怠』の語りの権威の構成は単純なことから、『倦怠』のテキストがパトリオティズムのテーマ処方に権威を与える際にも一層矛盾が少ないことが予想できよう⁽⁴¹⁾。

グレンソーンの登場人物としての属性、つまり優れた多言語能力・多文化理解や文化的に多様なナショナル・アイデンティティは、彼の語り手・語りの権威としての属性としても解釈可能である。例えば、彼のアイルランド方言の用法説明は、読者を対象としていることから、語り手・語りの権威としての、多言語能力・多文化理解のパフォーマンスとしてみなせるからである⁽⁴²⁾。また、いくつかの章に添えられたフランス語のエピグラフ表記も同様である。こういった意味で、文化的柔軟性を特徴とするパトリオティズムのテーマ処方は、語りの権威によって正当化される。

しかし、グレンソーンの先住アイルランド人達との血縁は、語りの権威とテーマ処方の間に緊張関係をもたらす。なぜなら、その血縁こそが語りの権威を正当化するものとして表象されている、と読者が解釈する可能性が高いからである。Susan Lanserによると、「著者的な声」⁽⁴³⁾と「個人的な声」の概念は、差異があるものの、二項対立の関係ではない⁽⁴⁴⁾。両方とも自らの語りを「権威づける」レトリックを特徴とするという共通項も持つ。エッジワースの作品の語りのモードの主流は、読者が歴史的な著者と同一視しがちな「著者的な声」である。『倦怠』が「アイルランド物」の語りを権威付けるのに、その「著者的な声」の代わりに、敢えて先住アイルランド人と血縁がある「個人的な声」を用いることは、「フィクション外の声」(‘extrafictional voice’⁽⁴⁵⁾)が帯びるエッジワースのナショナル・アイデンティティ——「アングロ・アイリッシュ」とレッテルを貼られる——とアイリッシュ・ネイションの間に居心地の悪い距離をもたらす。なぜなら、そういった語りの戦略は、アイルランドの社会問題を扱った語りを権威付けるのに、アングロ・アイリッシュ系支配層の権威よりも、先住アイル

ランド人の権威の方を正当とすることを示唆しているのだ、と解釈されがちであるからである。それゆえ『倦怠』の語りの権威は、アングロ・アイリッシュ系の人々をアイリッシュ・ネーションの一員として正当化しうる、文化的に柔軟なパトリオティズムのテーマ処方と、スムーズに連携しない。

階級問題に視線を投ずれば、登場人物としてのグレンソーンの人物造型は、「とりかえばや」プロットから小作人、専門職、貴族の諸階級を横断するが、それも上述の通り伝統的な土地制度を揺るがさない範囲においてである。従って、語りの権威としてのグレンソーンの「個人的な声」も、地主階級と専門職階級の提携を体現すると解釈可能であることから、理想のパトリオティズムのテーマと連携する。ジェンダーに関しても、語りの権威とテーマ次元の間に矛盾はないように思われる。なぜなら、女性の「公的な声」を欠く語りの権威と、女性の役割を制約するテーマ処方との間に、摩擦は認められないからである。

このように語りの権威とテーマ展開の間に、一貫性と同時に矛盾が認められている限り、『倦怠』が、テーマ処方のパトリオティズムを、特にその文化的柔軟性を目指す側面を、躊躇なく権威付けすることはないと言えるだろう。さらには、テーマと語りの権威に共通した女性を制約する囲い込みですら、タイトル・ページに記される「フィクション外の声」とは、緊張関係にある。その「フィクション外の声」が、多言語・文化理解を備えた地主階級出身の「女性」作家という専門職で知られるエッジワースの権威を帯びているからだ。こうしてテーマ次元が処方する理想的パトリオティズムが、「フィクション外の声」と緊張関係にあることから、『倦怠』というテキストにおいて、この処方は一見したほど有効ではないとも結論できよう。ところが、「著者的な声」により権威付けされるエッジワースの他の作品では、そうでもない。

エッジワースの「著者的な声」は、読者にしばしば「フィクション外の声」と同一視されることから女性性を帯び、多言語能力のパフォーマンスを行うことで、理想のパトリオティズムのテーマ処方による女性の多言語能力の制限を、解消する。男性と決定的にジェンダー付けされる『倦怠』の「個人的な声」にはこのような解消効果はない。しかし、その制約を逆に解消しない・できないのが、『倦怠』の語りのモードの意義であると考えられないだろうか。この語りのモードは、理想のパトリオティズムのテーマ処方と「フィクション外の声」の間の緊張関係を解消できないことで、テキストがパトリオティズムの概念を紡ぎあげる際のジェンダーに関するジレンマを浮き彫りにする。そのことから、エッジワースのフィクションが、父親と共同執筆した男子対象の『専門教育論』を安請け合いするどころか、その理論から批判的な距離をと

っていると解釈することさえできるのだ。そして、その距離の微妙な操作を可能にするのは、「個人的な声」及び「著者的な声」を活用した語りの技巧に他ならない。

『倦怠』を含めたエッジワースの「ネイションの物語」は、理想のパトリオティズムの処方方を介して、文化の個別性を重視する一方排外を回避する「ネイション」の概念を提案する。そしてその啓蒙主義とロマン主義の制約に挑む「ネイション」の概念形成が、単なるテーマ次元におけるイデオロギー転用に終始するだけでなく、語りのモードを洗練して精妙に展開するところに、エッジワースの作品の文学的価値を見出すことができるのではなかろうか。

注

『倦怠』の引用は次の版からとする：*The Novels and Selected Works of Maria Edgeworth*, ed. by Marilyn Butler and others, 12 vols. (London: Pickering & Chatto, 1999-2003), I: *Castle Rackrent, Irish Bulls, and Ennui*, ed. by Jane Desmarais, Tim MacLoughlin and Marilyn Butler (1999).

1. Katie Trumpener, *Bardic Nationalism: The Romantic Novel and the British Empire* (Princeton: Princeton UP, 1997), p. 132.
2. 'patriotism' の和訳は厄介である。姜尚中や上野千鶴子の著作におけるように、「パトリオティズム」とカタカナ表記されることもあるが、「ナショナリズム」という語ほど日本語に定着していないのが現状である。しかし、上野が『ネーションとジェンダー』（青土社、1998年）で留意するように、パトリオティズムを「愛国心」や「愛国主義」と単に解釈するのは誤りである（p. 186）。その語が必ずしも国家（state）への忠誠心を伴わない郷土（ラテン語の *patris*, 英語では *fatherland, country*）への愛を意味することもあるからである。従って、本稿でもカタカナ表記を用いる。そして、*Oxford English Dictionary* の語義を応用し、「パトリオティズム」を、郷土や祖国（これらも上野や姜が留意するように、個人に想定された「郷土」や「祖国」である）、そしてその共同体の仲間への愛着と献身、と定義する。
3. 本稿で言う「専門教育」とは、元来の 'profession' とみなされた、聖職者、法曹、医者、軍人、などの専門職に必要な知識、技術、倫理を教授する教育を意味する。
4. 『パトロニッジ』（*Patronage*, 1814）と『不在地主』（*The Absentee*, 1812）の例については、Yuri Yoshino, "'Spain Vanished, Green Ireland Reappeared": Maria Edgeworth's Patriotism in *The Absentee* and *Patronage*', in *New Voices in Irish Criticism* 5, ed. by Ruth Connolly and Ann Coughlan (Dublin: Four Courts P, 2005), pp. 166-77 参照。
5. エッジワースの主要小説の典型的な語りのモードは「三人称」である。
6. 「政治的読み」の典型は、ポストコロニアル理論・フェミニズム理論を援用して、テーマ次元、特に、プロット・人物造型に注目したイデオロギー分析である。最近の例外、Sha-

ron Murphy, *Maria Edgeworth and Romance* (Dublin: Four Courts P, 2005) は、エッジワースの「ロマンス」形式利用に、植民地体制を支持するイデオロギー性を認める。新鮮な解釈を盛り込む歓迎すべき貢献であるが、エッジワースの「意図」を強調する余り、テキスト解釈を伝記と辻褃を合わせる方向で結論に至るのが惜しまれる。

7. 紙面制約の為、以下では一次文献の詳細な分析を交えた議論を省略する。より徹底した議論は、Yuri Yoshino, 'Voices, Identities, and Nations in the Narratives of Maria Edgeworth (1767-1849)', unpublished doctoral thesis (U of London, 2005) の Chapter 5 Section 5.1 参照。
8. イギリス連合王国 ('The United Kingdom') のこと。1801 年には、イングランド、ウェールズ、スコットランドから成るグレート・ブリテン (1707 年成立) とアイルランドが合同して、アイルランドを含むようになった。
9. 引用使用版は、*Reflections on the Revolution in France*, ed. by L.G. Mitchell (Oxford: Oxford UP, 1993)。
10. 引用使用版は Richard Price, *Political Writings*, ed. by D. O. Thomas (Cambridge: Cambridge UP, 1991) 収録のもの。
11. 引用使用版は、David Hume, *Political Essays*, ed. by Knud Haakonssen (Cambridge: Cambridge UP, 1991) 収録のもの。
12. エッジワースの書簡には、彼女がヒュームのエッセーを精読愛読した様子が伺えることが記される。例えば、H. W. Hausermann, *The Genevese Background: Studies of Shelley, Francis Danby, Maria Edgeworth, Ruskin, Meredith, and Joseph Conrad in Geneva with Hitherto Unpublished Letters* (London: Routledge & Kegan Paul, 1952), p. 111 参照。また、Phillipson によると、スコットランドの合同論争言説が、'monarchy' 「君主制」や 'republic' 「共和国」などの「狭義な」政治語彙はスコットランドの現状を論じるのに不適切だとして、'nation' 「ネイション」や 'country' 「郷土・国」など「曖昧な」語を好んだ傾向を、ヒュームの政治哲学言説が深め普及させた。Nicholas Phillipson, 'The Scottish Enlightenment', in *The Enlightenment in National Context*, ed. by Roy Porter and Mikuláš Teich (Cambridge: Cambridge UP, 1981), pp. 19-40 (pp. 25-26) 参照。こういった「曖昧な」政治語彙を好む傾向の好みは、エッジワースの作品小説でも観察できる。
13. ヒュームやスミスは、ポール・ロワイヤル文法による「普遍文法」の探求やヴォージュラによる標準フランス語推進には興味があった。Peter Jones, *Hume's Sentiments* (1982), pp. 136-37. また、Anthony Smith は「ネイション」の概念形成を、「領域的な」ネイションと、「エスニックな」ネイションの、二つの様相に分けて考える。前者はネイションの「最初で、そしてしばらくの間、唯一であった」概念であり、フランス啓蒙主義者達が想定し、アジア・アフリカの植民地支配者及びその後継者が植民地体制正当化の拠り所とした。Anthony D. Smith, *The Ethnic Origins of Nations* (Oxford: Blackwell, 1986), p. 135.
14. 啓蒙主義コスモポリタニズムとロマン主義ナショナリズムの間には、連続性もある。例えば、イギリスのようにフランスも 'manners' を遵守すべきであるというパークの『省察』における提言は、同じ方策がイギリス社会とフランス社会両方において同様に効果的であろうと予想するコスモポリタンの視点を前提とする。

15. パークは、エッジワース同様、アングロ・アイリッシュ系地主階級の出身であった。厳密にはイングリッシュ・ネイションの一員と見做され難かったであろうパークが、『省察』において、イングリッシュ・ネイション（およびブリティッシュ・ネイション）としばしば同一化した呼称‘we’を用いて文化ナショナルイズムの提言をしているのは、注目すべきテキスト上のナショナル・アイデンティティを構築するふるまいである。このような『省察』の語りのモードは、後述する『倦怠』の語りのモードよりも、著者とイングリッシュ・ネイションの同一化を緊密にする効果を持つことを指摘しておく。また、パークの『省察』とブライスの『説教』の明確な対比は、Tom Furniss, ‘Cementing the Nation: Burke’s Reflections on Nationalism and National Identity’, in *Edmund Burke’s Reflections on the Revolution in France: New Interdisciplinary Essays*, ed. by John Whale, pp. 115-44 参照。
16. 例えば, p. 162.
17. John Whale, ‘Introduction’, in Whale (ed.), p. 8.
18. Joep T. H. Leerssen, *Remembrance and Imagination: Patterns in the Historical and Literary Representation of Ireland in the Nineteenth Century* (Cork: Cork UP, 1996), p. 24.
19. Esther Wohlgenut, ‘Maria Edgeworth and the Question of National Identity’, *Studies in English Literature*, 39 (1999), 645-58 (p. 653) も参照のこと。Hollingworth が指摘するように、『倦怠』はアングロ・アイリッシュの支配の正当性の危機を、1798年の統一アイルランド協会の反乱に伴う政治的分派と結びつける。Brian Hollingworth, *Maria Edgeworth’s Irish Writing: Language, History, Politics* (Basingstoke: Macmillan, 1997), p. 126.
20. その詳細は、R. F. Foster, *Modern Ireland, 1600-1972* (London: Allen Lane, 1988), pp. 241-58 参照。
21. Clíona Ó Gallchoir, ‘Maria Edgeworth and the Rise of National Literature’, unpublished doctoral thesis (U of Cambridge, 1998). Wohlgenut の論文については注 19 を参照。
22. W. J. Mc Cormack, ‘The Tedium of History: An Approach to Maria Edgeworth’s *Patronage*’ in *Ideology and the Historians*, ed. by Ciaran Brady (Dublin: Lilliput P, 1991), pp. 77-98 (p. 84).
23. このような序文、伝記的資料や作品テーマから、エッジワースのフィクションは父親の信念を分かり易い形で発信する装置に過ぎないとする過小評価があるものの、Mitzi Myers が警鐘を鳴らしたように、作品そのものの価値をより慎重に評価すべきであるとする批評態度が高まってきている。Mitzi Myers, “‘Completing the Union’: Critical *Ennui*, the Politics of Narrative, and the Reformation of Irish Cultural Identity’, *Prose Studies*, 18 (1995), 41-77 (p. 46).
24. Richard Lovell Edgeworth [and Maria Edgeworth], Advertisement for *Essays on Professional Education* (London: J. Johnson, 1809).
25. Elizabeth Kowaleski-Wallace, *Their Fathers’ Daughters: Hannah More, Maria Edgeworth, and Patriarchal Complicity* (Oxford: Oxford UP, 1991), pp. 160-64.

26. 『バトロニッジ』の専門教育テーマは、アルフレッドの法曹教育の試練を多言語能力を鍛える機会とし、彼の成功を法廷で必要に応じて「迫力とペースをもって」弁護する行為で象徴する。
27. 17世紀言語哲学を援用した、より明確な多言語能力と多文化理解連関のテーマは、『バトロニッジ』で展開される。(Yoshino, 'Spain Vanished', pp. 169-72)
28. Deborah Cameron, *Verbal Hygiene: Politics of Language* (London: Routledge, 1995) の Chapter 1 参照。
29. 「イングランド物」の『ハリントン』(1817)のユダヤ人登場人物の多言語能力も同様の扱いである。また、エッジワースの作品が理想とするパトリオットの多言語能力は、ゲール語理解を英語のアイルランド方言理解ほど必要としない。
30. Marilyn Butler, *Introduction to the Penguin Castle Rackrent and Ennui* (London: Penguin Books, 1992) pp. 33, 36.
31. Butler, *Introduction*, p. 47.
32. 例えば、『オーモンド』において、理想的な所領経営を行っているようにみえるアナリー一家も、所領権利に関する法律文書の文面不備から家族内相続に失敗し、所領管理の継続性を確保できないことで、地主として根本的な欠陥を晒すエピソードがある。
33. ジェラルディーンが家柄のない恋人と結婚できるよう経済援助を行ったり、グレンソー領を生来の持ち主に返還するエピソードなどが代表例。
34. 後期「アイルランド物」の『不在地主』、『オーモンド』においても同様である。
35. バークの伝統的土地制度信奉は広く知られた所である。'Republic of Letters'を中心概念とした啓蒙主義も、Heilbronerによると、結局は階級制度の転覆を想定していなかった。Robert L. Heilbroner, 'The Man and His Times', in *The Essential Adam Smith*, ed. by Robert L. Heilbroner (Oxford: Oxford UP, 1986), pp. 1-11 (p. 3).
36. チューダ朝以降にイングランドより植民してきた「ニュー・イングリッシュ」より前にアイルランドに植民してきた、アングロ・ノルマン系の「征服者」達。先住民文化・慣習を吸収し、カトリック信徒が多かった点で、「ニュー・イングリッシュ」と異なる。
37. Butler, pp. 42, 44.
38. バークが唱える家父長制的な定義の「女性らしさ」はすでに多くの研究者によって論じられているので、ここで改めて説明する必要はないであろう。啓蒙主義者達のジェンダー観については例えば次を参照のこと。Kathryn Sutherland, 'Adam Smith's Master Narrative', in *Adam Smith's Wealth of the Nations*, ed. by Stephen Copley and Kathryn Sutherland (1995), pp. 98-99, 112, 117-18.
39. Susan Sniader Lanser, *Fictions of Authority: Women Writers and Narrative Voice* (Ithaca: Cornell UP, 1992), pp. 18-19. Lanserの物語論をエッジワースの作品解釈に応用する意義の理論的な根拠は、Yoshino, 'Voices'のChapter 2参照。
40. Myers (pp. 64-65)のように、『倦怠』において、歴史や登場人物のアイデンティティの内容が、女性の(例えばエリナーやジェラルディーンの)私的な言葉の社会的な流布に左右されるとみる解釈から、テキストにおける女性の語りに大いなる権威を見出すことも可能である。しかし、語り手が読者に向かって直接語る「公的な声」('public voice')と、フィクションの世界の中の登場人物に向かって語る「私的な声」('private voice')の差異は、

厳密に区別する必要がある (Lanser, *Fictions*, p. 15)。たしかに、女性登場人物達の「私的な声」は、「公的な声」の一種であるグレンソーンの「個人的な声」との間に緊張関係を生み出し、後者の権威に挑戦するかもしれないが、その挑戦は同じ語りのレベルにおいて、グレンソーンの「声」に拮抗するものではない。

41. 『倦怠』にも自称「編集者」の注はある。この語りがグレンソーンの「個人的な声」と区別できるとしても、登場が稀で存在感が希薄である。
42. Hollingworth は、『倦怠』において、エッジワースが一貫してアイルランド方言をイタリック表記し、読者の関心を引くと指摘する (p. 136)。作品はグレンソーンの回顧録という体裁をとっているので、その強調表記は彼の多言語能力の刻印としても解釈できる。
43. Lanser, *Fictions*, pp. 15-18.
44. Lanser, *Fictions*, pp. 20-21.
45. Lanser, *The Narrative Act: Point of View in Prose Fiction* (Princeton: Princeton UP, 1981), p. 122-32.